

… 雨でも休まず；第122回 …
「若柳・嵐山の森」から

- ・活動1：1月3日(第一土曜日)は、“雨でも休まず”とは言いながら、さすがに3日は、休むべきが常識との皆んなの意見にて「お休み」です。
- ・活動2：**里山交流の活動**：1月18日(第三日曜日) 参加費なし。
 午前中は、恒例の森の神様と鈴木様にご挨拶と軽い森林作業
 午後は、新年会です。場所は「五本松」。沢山の参加を望む。
 * 新年会参加費：大人4,000円、学生・子供3,000円、6歳以下無料。
 * 必ず申込必要、TEL & FAX 03-3411-1636／事務局まで。
- ・初参加者：相模湖駅前：9時15分まで待つ。8時42分、9時02分 JR高尾発。
- ・服装；汚れても良い格好・着替え 着替え 足元が滑らない履物
- ・持参品；万一の怪我に備えて…保険証写し。そして、作業を楽しむ“ゆとり”と怪我をしない「心構え」

森林の持続的な再生・保全のために…

国産材が使われないために私有林は荒れる一方で、国はこうしたら良いという方向を示してはいるが、行政が縦割りに成らざるを得ない弊害と森林（林業）が深く広いため“木を見て森を見る事の難しさ”が災いして先が見えない。

法人化して6月に第一回通常総会を開催した。森林は“癒し”的感覚から抜け出して森林に特化した事業に、必ずしも順調に推移した訳けでは無いが、それなりに意味のある形を成しつつある。当会は、「エコロジー（環境）とエコノミー（経済）は本来、矛盾しない」を実証するために“森を作る／FSC活動”に対し、森と生活者を繋ぐ：“森を生かす／FCC事業”の創出に取り組んでいる。水源環境税を考えるにしても、森林の経済性・持続性の方策のない税の一方的な投入に反対だ。

森林に経済性を持たせようとする当会の取組は、環境教育事業としての「緑のダム学校」、エコ環境ツアーサービス「甲州古道」、間伐材・国産材活用事業「木質バイオマス利用、間伐材各種製品開発、流域材建造物の推進」などである。見放されている私有林に経済を循環させる試みに、微かに、お金が流れる兆しが見えて来ている。

新しい挑戦

～NPOが主導する森づくり

園田安男

FSC認証森林にするという目標が少しずつ進んでいる。とりあえず、「緑のダム北相模」内部の合意もできつつある。「大変そうだけど、やってみようか」というふうに。

これまでの議論をふりかえると、FSCの認証を「取る」ということが目的であるかのように感じられたかもしれない。でも、私たちの活動からいえば、FSC認証の森というラベルを貼れるかどうかはそう大した問題ではない。「認証を取る」というのは結果でしかないのだ。「計画的な森づくりをする」というのが、そもそもの意味なのである。

よく言っていることでいえば、50年後の森をイメージして活動したいのだ。今ある現状、つまり放置された森林を元に戻すというのが活動のゴールではないことはみんな知っている。放置された状態を回復することは、50年後の森林に至る過程、なのだから。

とりあえず、50年後の森づくりのための現在から、当面の段取りを確認しておきたい。

1) 活動を通して模索しているのが現在。

- ①森林の原状を回復する。手を加えられたが放置され、雪や風で痛んでいる現状を回復すること。わかりやすくて、間伐やツル切りをきちんとして、樹木が樹木として生きやすい状態に、まずはすること。今、森林作業班でやっているのはこのことだ。
- ②森林の経済的な価値を消費する側から検証する。木を使うことが経済的な価値となるよう、木つ端を売るという小さなことから、家を建てるという大きなことまで様々な方法を模索している。バイオマスエネルギーの活用などもこれにつらなる。
- ③森林の多様な活用方法を模索し、地域との接点をさぐる。これは、緑のダム学校や古道を活かす活動や、お花畠づくり活動などでやっていることだ。生態系の調査もこの森を活かすための基礎的な活動だ。
- ④神奈川県や相模湖町など行政との連携、また流域のグループなどとの連携、森林組合や林業関係団体との連携など、ネットワークシステムを作るために模索している。

これら「緑のダム北相模」の現在のプロジェクトは、いわば、あっちこっちに網を仕掛けているということだろう。大物がかかるかどうかはわからないが、網を仕掛けなければ魚は捕れない。

2) 50年後の森のイメージをつくる計画づくりが当面の課題。

この森づくりの基準としてFSC認証森林のものを使おうとしてきた。ただ、この基準は、よい森づくりを行うにはこれこれを配慮すべきだということでできあがっている。法を守っているか、環境に配慮しているか、情報が公開されているか、記録が残っているか、などなど。私たちはこれにとどまつてもしようがない。もっと前向きな森づくり計画そのものを持たねばならない。

具体的なことでいえば、用材生産の森という視点から、豊かな植生を持つ森という視点から、景観という視点から、多様な人々が参加できる森という視点から、イメージを作つてみよう。

例えば、立派なヒノキ材を作るという目的を持つとする。すると、どこの場所のどれを、どういう施業の仕方で育てていけばいいのか計画しなければならない。本当に良い材を作ろうと思えば、素人には作業させないということも計画の一部になり、だったら本格的な仕事のできる人材を養成するということが必要となり、この人材養成も計画の一部とせねばならない。

豊かな植生、優れた森林景観、参加できる森、どれもこれも知恵を出し、エネルギーを注がないとできないことばかりだ。

4) 計画づくりの基礎、「若柳・嵐山の森」の現状調査を始める。

12月の会議で確認されたように、いよいよ「私たちの森林簿」づくりを始める。まずは、現状がどうなっているのかを客観的なデータで明らかにしていく。この調査は篠田さんのような専門家の指導でやっていくので勉強にもなる。多くの人たち、とりわけ若い人たちは参加するといいと思うよ。

そうすると、いよいよ計画づくりの会議になる。これはみんなが期待する森にするには、という話だから楽しいぞ。樹木や草花、あるいは野鳥などを観察し、学習できるというような「学びの道」を作りたいと思ったとすれば、計画会議に参加して、計画に押し込めばいい。

最後に、もうひとつ、強調。

森林に普通の人がこういう関わりができるということは、画期的なことだ。これまで森林はその所有者個人の、ある種、私的な計画の中のものだった。鈴木さんがそこから「解放」したのだ。鈴木さんが自分の山をNPOが、つまり多くの人が自由に参加して森づくりをしてもいいよ、といつてくれたことから可能になったことばかりだ。鈴木さんの期待に私たちが応えられれば、「NPOによる森づくり」という新しい流れになりうる。

活動報告 1 : 森林作業／第一土曜日（12月6日）

- 天気予報では雨だったが、駅に着くと雨具も薄くどちら付かずの模様。23人の参加。
- 森林作業特化日にて、大部分の仲間が尾根に近い「協力協約のC地区」に入った。除伐・枝打ち作業に入った。基地から遠いので各自、弁当持参。
- 林道から作業道に入る入口に作業道に撒くチップを片付けていたら「カブト虫」の幼虫がゴロゴロと30匹ばかりが出て来た。“来年夏に成虫になって出ておいで”と埋め戻した。
- 基地には、5人が残って基地回りの片付けなど。
- 寒くもなったし参加者も増えたから、焚き火場をもう一か所、計2ヶ所にした。



林道に敷くチップの中から出て来た幼虫

運営会／作業班が少し遅く戻って來たので「運営会」は基地でやろうと言う事になった。

- 事務局提案 現在、必要とする打合会は、1)活動運営会、2)FSC勉強会、3)法人執行部会だが効率良く行うために以下のようにしたいと提案して、採択してくれた。
 - 活動運営会：毎月第一土曜日、活動終了後。1月を除く。
 - FSC勉強会：毎月第三日曜日、活動終了後、4時から。
 - 法人執行部会：毎月第三日曜日、FSC勉強会終了後、6時頃から。

* カドヤ会議も大切。そこで出た大切な案件は、運営会で出して貰う事にしたい。
- 誰ともなく出た提案だが…、「会議室での打合会は、固苦しい。基地でやろう」。
「いいね、いいね」の声多數にて決定。但し、冬場は無理。少し暖かくなってから。
- 1月の第一土曜日は、どうすんの？。やるよ、と答えたが…。後日、カドヤ会議の採択は中止。
1月3日に山仕事と言うのは、いささか問題。余り、突飛な事をしないが良いと反省。
- 朝礼の時に畠班を預かる須藤仲間から報告／この一夏、取り組んでみて専従者がいないと無理と分かった。ご子息の史比古さんが「引き受けましょう」と助け船を出して下さった事もあって一旦、お返しすると言う事にしたい。但し、後片付けをキチンとするのが礼儀と思うので皆さん、宜しくの報告。植樹木の事など後片付けをどうするか、次回までに計画を提出してもらう。

車座になって森の中で会議は、気持ちが良い。余分な議論・評論なしに物事が決まって行く。

活動報告 2、里山交流・緑のダム学校／第三日曜日（12月21日）

気温やや低めの快晴。本年最後の活動に“損保ジャパン／エコ青年隊”共催による「緑のダム学校参加者7名」を含む54人が集まった。

森林整備班のC地区は、基地から距離が遠くお昼には降りて来ない事にして弁当持参にした。暫くは

そうするので整備班参加者は宜しく。

昼過ぎ、作業現場を見に行つたが、C地区隣接の広葉樹林の常緑広葉樹も整理されて森は、随分と明るく美しくなっていた。

「緑のダム学校」は、金子さん一家、伊藤さん家族と石田さん、砂川さん含む総勢22名が“落ち葉”を“テーマに冬日の森に入った。金子知美ちゃん(小4女子)のお母さんが書いてくれた参加感想文は、以下。

樅(モ)の木とイヌ柏(カヤ)の違いを教えて頂いたり、拾った沢山の落ち葉で葉の特徴や名前を教えて頂いたりで、いい勉強になりました。また、間伐体験やカブト虫の幼虫取りなど、面白く森林体験をしてとても楽しい一日でした。森の中で水が土に染み込んで行く状態など、「森林=緑のダム」だという事を良く理解出来ました。

自称／道路公団：土木班は、回遊バス（路）をNTT通信塔をグルリと回って遊歩道を作っていた。この道にも清水仲間と丸茂仲間がいろんな楽しく面白い仕組みを考えているらしい。冬日の落ちるのは早く、みんなが降りて来る3時頃には、日も陰ったが朝からの快晴で風もなく、今年最後の定例活動日も和気藹々に終了した。

「第2回：FSC認証準備会」…… 内容別紙。

先月、富村周平FSC認証審査員とWWFジャパンの前沢指導員による第1回は、「FSC内容の概略・現状」を話して頂いた。第2回は、生態系調査を指導してくれている篠田授樹仲間が準備してくれた。この説明会で以下の2点を決定した。

1) 推進班決定：主任；篠田授樹、副主任：鈴木敏美・富沢佑作

その他、必要な人材もあり篠田主任が検討・人選して報告する事とした。

2) 森林状況図：この森の森林状況を把握しない事には、何をどうして良いかが分からないから、どうしても基本データが必要と言う事で「森林状況図」を作成する事にした。

●その他の報告、1/林業技術講習会：12月18日

技術講習会／1) 間伐木の選木実習、2) 間伐・造材実習、3) 集材実習、4) 簡易製材実習

主 催／津久井行政センター／林務部森林保全課

共 催／神奈川県／林業協会津久井支部・生産組合・林業振興協議会の各津久井支部

秦野・伊勢原地区林業推進協議会・NPO法人緑のダム北相模



林内での自走式製材機のデモ

各組合長、組合員など約50名の参加を得て午前中は、オガヤ式間伐講習会で午後は、自走式製材機のデモンストレーションが行われた。自然乾燥した木を柱にする事で搬出と製材コストを下げると言う試みでオガクズや端材を林道つくりなどに使えると言う利点もある。検討してみる価値はあるが、N P Oとしてどう取り組めるか。

3時からの意見交換会では、県担当者（厚沢技官）から当会が正式に紹介された。園田理事がN P O法人活動の状況を説明した。また、県／指導林家に

して当会の理事である尾形侯夫氏が更に、補足して行政や大学、企業とも協働している当会を紹介した。

* 当会を津久井・厚木・秦野の森林関係者の方々にこんな形で紹介して下さる県のご配慮に深く感謝します。お昼、暖かい豚汁を準備してもてなしましたが皆さん、何杯もお代わりをして下さいました。

●その他の報告2 / 厚木市で「純国産材住宅説明会」

同日、「協同組合：匠の会：神奈川中央」から建築現場で“何故、国産材にこだわるか”を説明会参加の人々に話して欲しいとの依頼を受けた。10年以上も前から相模原市拠点に熱心に活動を続けている倉橋満知子仲間に講師をお願いした。参加者は地区の生協の人々、約20人位であったが熱心な質疑が出た。当会では、この夏から「森から住いに繋ぐ」をコンセプトに活動を始めているが既に、幾つかの建築案件も出ており“森にお金を返す仕組みつくり”も少しづつ姿を見せ始めている。

当会では、「桂川・相模川流域の森」を活性化するために「協同組合 匠の会」とは、水源の森と都市部の各地でこの形の広報を積極的に進める事としている。

●その他の報告3 / 水源環境の再生・保全：意見交換

県：企画部（土地水資源対策課）、環境農政部（林務課）

12月1日、県／本庁舎：会議室で当会から「吉田・石村・兼松・大坪・丸茂・中田・岡本の7名」県からは「企画部の国守課長、環境農政部から山中技官など7名」で話し合った。

一介の森林N P Oに対し、県担当部署が正式の話し合いの場を設けてくれた事に心から感謝する。双方、2時間に渡って真剣に、正直に、誠実に意見交換をした。行政のできる事・できない事、N P Oのできる事・出来ない事、互いに何が補完できるかなどが明確になった。内容は多岐にわたるので会員の皆さんには、会M Lで御覧下さい。

●その他の報告4 / 森林現場（北都留・津久井）訪問

F C C事業／流域材住宅推進班に流域材住宅の引き合いが出始めている。流域材の入荷経路の確認が

必要となった。木材市場では、流域材の流れが確認できないから、自分の足で歩いて確認しなければならない。また、流域材の「品質・価格・数量・供給体制」を整え、相模原市(川帳)、平塚市(大蔵市長)、茅ヶ崎市(阿部長)には、“神奈川県の森林の再生・保全”に協力のお願いをしている。体制を整えて他の市・町にも申し入れ県の「水源環境の再生・保全」政策を下支えする事にしている。

森林現場チェックのため、先端林業を進める北都留森林組合と津久井郡で一人、気を吐いている佐藤好延さん(有,佐藤幹)さんを訪ね、夫々の森林現場を見て協力し合う事を約した。印象は、以下の通り。

「収穫期に入った木が有るじゃないか。私有林でも、頑張っている人もいるじゃないか。それなのに材が出て来ないのは、“素材生産(地主~林業)～原木流通～製材加工～製品流通(設計・施工・施主)”が分断されているからだ」。“木を見て森を見ない／縦割り行政”的指導のもとに進められて来たからこうなるのは、当然の帰結。この問題は、全ての壁を取り払って取り組めるN P O活動のみが解決できる。

甲州古道小原宿

小仏峠から底沢に下山した甲州道中は、往時は底沢川を板橋で渡り、大久保沢川を樋谷路橋を渡り本陣東側を鋭角的に曲り小原宿に入りました。

宿並は東端に吉野宿までの道中お達しの駄賃、人足賃が掲示されていた御高札所が建っていました。宿並はここより2丁半(273メートル)の宿内に29件の家が並んでいました。

小原宿は、江戸より15里20間(約60.2キロ)で道2.5間(3.6m)程度で本陣、脇本陣と7軒の旅籠があり、25人25疋の人馬が常備された継場でした。小仏峠を越え、小原ら宿に泊まった旅人は、次の与瀬宿を通り越して吉野宿に継ぐ下り片継宿場でした。

宿内は、大久保沢川の樋谷路沢より240間(約430m)の懸樋を架け水を引き、宿内を流し各戸に導水し村民の便に供しました。流末は、宿中程より相模川に流下させました。

小原宿は明治28年8月7日午前1時に出火、本陣を含む東端4軒を残し全焼した大火が起こりました。その後、現在の町並が再建されました。現在も国道20号線(甲州街道)も町並みが東西に走り、本陣を始め和泉屋、清水屋、菊屋、藤屋、小松屋、伊勢屋、永楽屋、中屋等の屋号の往時旅籠をしていたと思われる家や駕籠屋、湊屋、榎屋等宿場にかかわりのある屋号の建ちならぶ家並は、宿場を忍ばせる風情を今なおとどめています。

この小原宿と神奈川県唯一の現存する建造物である本陣を祭る甲州街道小原宿本陣祭が、今年で10回を数え11月3日に催され、往時の町並み再現と大名行列で賑わいました。

本陣内に掲示された甲州古道プロジェクト作成の往時的小仏峠から小原宿までの甲州道中の写真展にも深い関心が寄せられました。
(文責 中里)

- 1) 1月18日(第3曜日) : 里山交流
9時30分、参加費無料
午前 ; 森の神様に新年の挨拶
軽作業
午後 : 新年会

モットー／休まず、無理せず、急がず、楽しく、ボチボチと
そして、沢山のご意見、参加下さい。
名 称／さがみ湖・森つくりの会(NPO法人緑のダム北相模/森林部会)
事 务 局／〒154-0023 世田谷区若林3-35-9
T & F 03-3411-1636
協働団体／セブン-イレブンみどりの基金

H P : h t t p : // w w w 0 0 8 . u p p . s o - n e t . j p / k i t a s a m i

支援団体 : WWF ジャパン、損保ジャパン環境財団、日本財団、住宅生産団体連合会 イオン財団